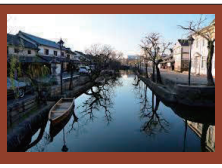
倉敷市版の生活支援体制整備事業 ～豪雨ニモマケズ～

生活支援コーディネーターが地域支援に専心できる体制があったことで、発災後直後から被災地に寄り添い、支え合い活動・復興の推進力となっている。災害をきっかけとして市内に支え合いの萌芽が広がっている。



倉敷市版の生活支援体制整備事業 ～豪雨ニモマケズ～

発災

岡山県で戦後最大の災害「平成30年7月豪雨」発生

住み慣れた地域が一変

○**被害状況**（平成31年1月4日現在／ 岡山県危機管理課）
死亡者６６名(うち災害関連死５名)
行方不明３名

倉敷市の被害の概要

死亡者　55人（うち災害関連死3人）
住宅被害　5,857棟（全壊・半壊・一部損壊）
真備町内の４分の１が被害
最大５メートルの浸水

被災地に集結

生活支援コーディネーターを被災地の小学校区に一人ずつ配置

今だからこその地域支援

住民の声を聞き・これからのことを話し合い、地域に応じた復興の取組を練っていきました。

被災地発の支え合い

場の復活

これまでの馴染みの関係と地域愛から生まれた支え合い

■備える（服部）
発災前から、地域住民同士が作成した見守り支え合い台帳を活用し、川の決壊前にひとり暮らしの高齢者の存在に気づき、動き、尊い命を救いました。

■これから会議（呉妹）
発災2週間後に、地域住民が集まり、これからに向けた作戦会議を開催。住民同窓会や被災状況の訪問調査等話し合いのなかから多くの寄り添い支援が広がっています。

■帰りを待つ場所（薗）
川の決壊場所のすぐ近くで奇跡的に残った公民館を活用して、住民のなじみの場所づくりを行っています。地元住民と支援団体との連携で発災前よりも人が多く集う場所となっています。

つながりが備えに

「場」から広がる「支え合い」

■談話室ＢＡＲ（二万）
談話室にいつも集まる女性のアイデアで実現した男性も楽しめるバー。仮設団地だけでなく、地元住民の居場所に拡大中。

■お買い物ツアー（柳井原）
週に1回仮設団地のとなりの介護施設の協力で買い物ツアーを開催しています。買い物だけでなく、通院や花見などみんなで話し合って行き先を決めています。

多くを奪った災害
支え合いのきっかけを得た倉敷

被災地発支え合い活動事例集「豪雨ニモマケズ」発行

暮らし輝

災害にも地域課題にも負けない支え合いの地域へ